
ガラクタノカミサマ

ヒトリネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガラクタノカミサマ

【Zコード】

N1864E

【作者名】

ヒトリネコ

【あらすじ】

『カミサマ』 それは、この国を管理し、未来を予知する大規模な人工知能群。『巫女』 それは、カミサマの声を聞き、人々に伝える唯一の人間。カミサマと巫女は、この国の未来への道標となり、人々はそれに従つて暮らしていた。たとえそれが、いかなる“犠牲”を伴うものであろうとも……。これは、一人の少年“麻生ケイスケ”が妹の笑顔のために、カミサマと戦う物語。これは、C lairvoyanceさんのFLASH「ガラクタノカミサマ」を元にして作つた小説です。

プロローグ（前書き）

1話～3話まで、原作のFLASHと共にたぐいものですね。

プロローグ

「ダン！！銃声が響いた。

大勢の男たちに、一人の少年は一発弾丸を撃ち込まれた。

「うつ・・・。ちくしょう・・・。」

ケイスケは腹から血を流し、倒れた。

「諦める。」

周りを囲む男たちが、話しかけてくる。

「うるさい・・・。」

「諦める。麻生ケイスケ。^{あしょう}」

しつこく話しかけてくる。

「黙れ・・・。なんでエミが・・・。」

その瞬間、彼の頭に、猫を抱いた妹と一緒に撮った写真がよぎった。

しかし、それを遮るように、男たちは話を続けた。

「カミサマと巫女様が、私たちを理想郷へと・・・。」

彼は無視して、話出した。

「エミを・・・返せ・・・。」

必死に訴えた。

「妹を・・・返せよ・・・。」

しかし、誰一人として、彼を救ってくれる人はいなかつた・・・。

そのまま、周りの連中は去つていった。

「エミを・・・妹を返せ・・・。」

一人で、痛みに苦しみながら、訴え続けた。

「エミを・・・かえ・・・せ・・・。」

少年は、そのまま意識を失つていった。

瞳に一枚の写真の残像を残して・・・。

カミサマのおひざもと

ここは、カミサマが人々を導き、築き上げた未来世界。いたる所に、街を移動するための橋が張り巡らされている。

その世界の中心には、広い平地に建てられた、人が入ることは禁じられている、カミサマが祭られている建物“神社”がある。建物の中では巫女様がカミサマの声を聞いて、人々に伝えられる。

大きなモニターを見ながら、巫女様がカミサマに語りかけていた。
「カミサマ・・・。もうすぐこの国は理想郷へ辿り着きます。私たちがずっと願ってきた・・・理想郷に・・・。」

その頃、橋からこの街を見下ろしている一人の少年がつぶやいていた。

「“カミサマのおひざもと”・・・か・・・。ほんと凄まじい勢いで発展したもんだ・・・。でも、この街の人たちの、笑顔は見たことがない。」

彼は、街の人ごみに目をやり、言葉を続けた。

「まるで操り人形だな・・・。みんなカミサマの言われたとおりに行動する。たとえそれが・・・。」

そこで彼は、剣に映った自分の顔”麻生ケイスケ”を見て、最後に言葉を放った。

「だれかの命を奪うことでも・・・。」

すると、ケイスケには誰かが言い合いをしているのが聞こえた。

「ん? この街で、喧嘩は珍しいな・・・。」

ケイスケは、その会話に耳をやつた。

「なんだよこいつ。」

「巫女様の言うこと、無視するのか? やめとけって。」

「こいつに何を言つたって無駄だ。」

一人の少女が、三人の少年たちにいろいろ言っていた。でも、少女も口を開いた。

「つむぎーー未来の為とか言って、カミサマはパパとママを殺したのよー」「

彼女は泣いていた。親との思い出をおもいだしていたのだろう・・・。

そう・・・かつてのケイスケのよひみ・・・。

しかし、それを打ち消すかのよう、「一人の少年が言った。

「それで? カミサマに復讐でもするか?」

彼らは、少女を置いて後ろへ歩き出し、ひとこと言った。

「どうせカミサマに逆らつたって、俺たちに何ができるやしねえんだよ・・・」

少女は、歯を噛み締め、悔しがっていた。

少年の想い

満月の夜・・・麻生ケイスケは、神社へ向かつた。

カミサマと決着をつけるために・・・。

しかし、そこには喧嘩をしていた少女がいた。

その手には、銃が握られていた。

彼女も、神社へ向かつてゐるようだ。

「これ以上、無駄な血をながすわけにはいかない・・・。」

ケイスケは、少女を入り口で待ち伏せることにした。

少女が前を通ると、彼は彼女に声をかけた。

「何してんのだ・・・。」

少女は、ハッと彼に気づき、足を止めた。

「ここで見たことは黙つておいてやる。今すぐ引き返せ。」

目をつぶつて、少女に話しかけた。

すると彼女は、手に持つた銃を彼に向かた。

「こないで！あんたみたいな子供に何がわかるの！

銃を握つたその手は、恐怖で震えていた。

「子供・・・か・・・。」

ケイスケはゆつくり目を開くと、その瞬間、少女の手に握られていた銃は、彼の剣によつて二つに斬れた。

「おまえみたいな子供に何ができる？消されて・・・それで終わりだ。」

少女は、何もできない悔しさに涙しながら、走り去つていった。彼はまた目をつぶり、妹と一緒に撮つた写真を思い出しながら、心中で妹に話しかけていた。

「これでよかつたんだよな。今から・・・俺が・・・おまえを助けるからな・・・エミ・・・。」

彼が目を開き、剣を構えると、もう夜は明け、神社の前に何体も警備口ボが立ち並んでいた。

警備ロボに装備されているマシンガンが、一斉に銃声を鳴らし始めた。

嵐のように飛び交う弾を、彼は田にも留まらぬ速さで避け、一瞬で全ロボットを一刀両断で全滅させた。

それだけでは、相手も諦めず、飛行ロボットを送り込んだ。そのロボットも同じ武器が装備されており、一斉射撃をくりだしてきた。

しかし、それにひるむことなく剣にエネルギーをためて、それを放ち、ロボットを全滅させた。

神社の中では、巫女様が大きなモニターを見ながら、つぶやいていた。

「人間は愚かだ。絶えず争い、そして滅びを繰り返す・・・。だから、私がカミサマの声を届け、民を導いていく。」

巫女様は、そう言つとスイッチを押した。すると、手元のモニターは赤く染まり、「抹消セヨ」と書かれていた。

外では、ケイスケの前に、戦闘用ロボが立ちはだかっていた。さすがにそれには、苦戦したが、相手の打撃をジャンプで避け、そのまま剣にエネルギーをため、ジャンプ斬りでとどめを刺した。神社に入ろうとしたら、周りに大きなモニターが出ており、それにあの時の少女が肩から血を流して、映っていた。

その子に銃を向ける一人の大人が言った。

「悪く思うな。これも巫女様が伝えた。『カミサマのおぼしめし』だ。」

その瞬間、一人の少年が、銃を持った男の腕に飛び掛かり、しがみついた。

「くつ・・・！」

その少年は、あの時、少女と口喧嘩をしていた少年の一人だつた。しかし、その少年は銃を持った男に振り払われ、少女に銃口が向け

られた。

ケイスケは、最後までそれを見ることは無く、階段を上り、カミスマの祭られている場所へ辿り着いた。

そこには、巫女様が背中を向けて立っていた。

声を出そうとした瞬間、カミスマから、光弾が放たれた。

それは、彼に命中し、剣が弾かれた。

すると巫女様は、振り向き、ケイスケに話しかけてきた。

「20年間も、カミスマを恨み続けたか。そんなガラクタの体になつてまで・・・己の運命に抗うか！ 麻生ケイスケ！」

彼の体は、もはや人間の姿をとどめてはいなかつた。

いたるところから、配線や部品の一部が出ており、配線からは火花が散り、剣を持っていたほうの手は、さつきの光弾で無くなつてしまつていた。

それでも力を振り絞り、床に刺さる剣を、もう片方の手で握り、口を開いた。

「恨んでなんかいない・・・俺は・・・ただ・・・妹の笑顔を取り戻したいだけだ！」

そう言ってケイスケは剣を抜き、巫女様の目を見た。

「うちに帰るぞ！ カミー！」

少年の想い（後書き）

（次回予告）

巫女となつたエミの笑顔を取り戻すため、戦い続けるケイスケ。
はたして、エミは笑顔を取り戻すのか・・・？

次回

『兄の温もり』

兄の温もり

巫女様は、長い年月をかけて、心を失い、変わり果てたエミの姿だつたのだ。

その目には、光が無く、虚ろだった。

「私の家は、ここだ。今までずっとここに、カミサマの声を聞き、民を導いてきた。」

ケイスケは、体がボロボロでも、怒鳴るよう言い返した。
「そういう事じゃない！巫女なんてやめて・・・うちに帰つてこい！エミ！」

エミはクスリと笑い、話しが出る。

「何を言つ？では、この先誰が人々を導き、正しい道へ誘つていくのだ？カミサマの声を聞き、誰が導いていけるのだ？」

「そんなことする必要なんてない！人は・・・自分たちで未来を切り開いていけるはずだ！」

ケイスケがそう言つて、歩み寄ると、カミサマは光弾を放つてきた。体がボロボロなだけあって、避けることはできず、剣で防御し、一歩踏み出すたびにこらえ、体を壊していく。

体の鉄板には、ヒビが入り、配線は切れ、火花を散らしている。

それでもケイスケは、エミに話しかけていた。

「エミ・・・お前はどうして・・・そこまでカミサマの・・・言いなりになる・・・？」

ケイスケは、エミに近寄つていく。

近づくにつれて、光弾の威力は増していき、一歩一歩が辛くなつてくる。

でも、諦めるわけにはいかない。

「俺は・・・お前に・・・いつ・・・までも・・・笑つて・・・いて・・・ほ・・・しい・・・だけ・・・なんだ・・・。」

ケイスケの音声機能が、少し故障してしまって、言葉が聞き取りに

くくなっていた。

それでも、ちゃんとエミリは通じていた。

「笑う。その何の意味がある？カミサマの理想郷へ辿り着くために必要なものでもない笑顔に、何の意味がある？お前はカミサマにて勝てない。去れ！」

ケイスケは、光弾に耐えながらも、近づいていく。

「俺・・・は・・・あき・・・らめ・・・な・・・い。」

「なぜだ？お前は、なぜそこまでする？」

ケイスケは・・・ついに・・・エミリの田の前までやつてきた。カミサマの攻撃も止んだが、ケイスケの体は、無残な姿になっていた。

ケイスケがさらり、エミリに近づくと、残った片手をそつと広げ、エミリを抱き寄せた。

「な・・・何を！」

その瞬間、エミリは何かを感じた。

ケイスケの体から、ガラクタの鉄の冷たさが伝わってくる。しかし、エミリには、お兄ちゃんの愛の温もりも伝わってきた。

いろいろと伝わってきて・・・エミリは思い出す・・・20年前のことを・・・

その日、エミリは友達と喧嘩をしてしまい、家のリビングのすみで、膝を抱えて泣いていた。

エミリはどうすればいいのかわからず、ひたすら泣いていた。そこに、ケイスケが家に帰ってきた。

「ただいま。」

返事がなかつた・・・。エミリは泣いていたから、返事をしなかつた。リビングに、ケイスケの足音が近づいてきた。

そして、エミリの肩に、そつと手を置き、話しかけてきた。

「どうした？エミリ。」

エミリは振り返り、ケイスケの田を見て言った。

「・・・ぐすつ・・・喧嘩・・・」

ケイスケは、エミに優しく笑つてあげてから、抱いてやつた。

その体は、とても暖かく、優しかつた。

そして、ケイスケは耳元でつぶやいた。

「悲しいことは、いつまでも引っ張つていつたら、もつと悲しくなる。だから・・・。」

そのあと、顔を見合わせて、ケイスケはエミに言つた。

「涙をふいて、笑え。笑つて、仲直りをしてこい。そうすれば、泣いただけ、嬉しくなるから。」

「う・・・うん!」

エミは涙を拭き、玄関まで走つていつた。

「行つてきま～す!」

あの時の、お兄ちゃんの体の温もりを感じて、思い出した。

「・・・ぐすつ・・・」

エミは、涙を流した。心を失つたはずのエミが・・・泣いた。

抱かれたまま、エミは涙を流し、ケイスケの服をぬらしていつた。

ケイスケは、エミにつぶやいた。

「お・・・かえり・・・エミ・・・」

「ただいま・・・お兄ちゃん・・・」

ケイスケは、エミに優しく笑つてあげた。

エミも、ケイスケの壊れた顔の頬を、手でさすつてやり、笑つてあげた。

兄の温もり（後書き）

（次回予告）

ついにケイスケのもとに帰ってきたヒミ。

だが、喜びに浸る時間は薄く、カミサマが動き出す・・・。

次回

『ガラクタノカミサマ』

ガラクタノカミサマ

カミサマが急に、音を鳴らし始めた。
ジッジジッジーン。

カミサマが故障してしまったようだ。
神社が、揺れだした。

「な・・・んだ・・・?」

「私が、カミサマの全データ破棄スイッチを押したの。こにはもうすぐ倒壊する。早く逃げて。」

ケイスケはうなずくと、エミの手を引っ張つて、足を引きずり、歩きだした。

しかし、エミはケイスケの手を払つた。

「どうし・・・た・・・?」

「私はここに残る。私は今まで、酷いことをしてしまったから・・・。」

そう言って悔やんではいるが、ケイスケは、エミの手首をしつかりつかみ、歩き出した。

「いつ・・・までも・・・ひつぱ・・・るな・・・。笑顔は・・・どう・・・したん・・・だ・・・?」

エミは、この言葉を言われた瞬間、満面の笑みをケイスケに見せた。

「うん・・・ありがとう・・・お兄ちゃん。」

エミはそう言って、ケイスケに肩をかしてやり、歩きだした。
しかし次の瞬間、後ろからカミサマが、神社から分離し、ケーブルを足の変わりにして、迫ってきた。

目の前までやつてくると、動きを止めて、話し始めた。

「ミーハー。ドコエイク? ワレヲハキスルツモリナノカ? オマエハワレトモニアルハズダ。」

ケイスケとエミは、啞然としていた。

「こ・・・いつ・・・いつた・・・い・・・?」

「何で……？さつき、破棄スイッチを押したはずなのに……。」
すると、カミサマがケーブルで、エミを捕らえた。

「なつ……！」

「ミロ。オマエハワレノモノダ。オマエトトモニニンゲンヲミチビ
イテユク。ソレガシメイナノダ」

ケイスケは、剣を構えた。

「エミ……今……たす……けるか……らな……。」

足の鉄の骨を無理やり押し込み、一応走れるようにして、カミサマに剣を向け、走り出した。

カミサマの目の前で飛び、ジャンプ斬りをくらわしてやろうとした。
しかし、ケーブルがケイスケに巻きつき、包み込んだ。

沈黙が続いたが、ケイスケはケーブルを一刀両断で全て斬り払い、本体の上に乗つた。

剣先を本体に向け、一気に突き刺した。

剣を刺しつぱなしにして、カミサマから飛び降りた。
カミサマがぼやきだした。

「ナゼダ……。フレハゼッタイテキナソンザイナハズ……。ナ……ノ……ニ……。」

その瞬間、カミサマは、ガクンと傾き、停止した。

エミは、ケーブルから解放され、ケイスケの元へ走つていった。

「お兄ちゃん……ありがとう……。」

そう言って、ケイスケに触れたら、バタリと倒れた。

「お兄ちゃん！？」

ケイスケのガラクタの体に、限界が来たらしく、壊れてしまったのだ。

「お兄ちゃん！返事して！お兄ちゃん！」

必死にエミは声をかけたが、返事が返つてくることはなかつた……。

ガラクタノカミサマ（後書き）

（次回予告）

カミサマとの戦いは終わった。
Hは最後の仕事を果たす・・・。

（次回最終話）

『Hピローグ』

あの出来事から、数ヶ月後……。

停止したカミサマは、政府によって処分され、カミサマに関する全てのデータは消去された。

みんなが自分で考え、自分で行動できる社会が、ついに復活したのだ。

それから、更に数ヶ月後……。

とあるアパートでの事……。

「わかりました。すぐに向かいます。」

少女は、ガチャリと電話を切り、走りだした。

しばらくして到着したところは、修理屋だった。

「すいません……。」

少女がお店のドアを開けて声をかけると、店主がすぐにやつてきた。

「おう！待つていたぜ！さあ、こっちだ。」

店主に案内されてきたところは、さまざまなパーツの置いてある修理を行う部屋だった。

そこには、カーテンがかかっていた。

「あの……。“彼”はどこにいるんですか？」

彼女はそう言つと、店主は笑い、指差した。

「このカーテンの向こう側だ。彼もだいぶ待ち望んでいたよ。この日をな。少し言葉が話せるようになると、お前さんを気にしていて、ずっと喋りっぱなしだったよ。でも、今はもう完全に回復してるから、生活に問題は無いだろ。」

少女がクスリと笑つと、店主は気を取り直して、カーテンを開けるロープに手をやつた。

「では……心の準備はいいかい？」

少女がうなずくと、店主は思いつきりカーテンの開いた。

その向こう側に立っていたのは、緑髪の少年だった。

「ただいま・・・HII。」

その瞬間、彼女の目から涙が溢れ出し、彼の胸元に飛び込んでつぶやいた。

“・・・おかえりなさい・・・お兄ちゃん・・・”

ハピローグ（後書き）

今まで読んでくださった皆様へ、ありがとうございました。
これからもがんばるので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1864e/>

ガラクタノカミサマ

2010年10月11日02時54分発行